

近世的「長恨歌図」の一様態 —— 婚礼調度としての《長恨歌図屏風》（個人蔵）

村木 桂子（同志社大学）

玄宗と楊貴妃の悲恋を詠った白居易の詩「長恨歌」は、近世になると、屏風・絵巻・版本など多様なメディアに描かれることになった。これら「長恨歌図」のうち、大画面の屏風として知られているのは、《明皇・楊貴妃図屏風》（フリア美術館）と、やや小ぶりの《長恨歌図屏風》（個人蔵、『国華』1052号掲載）である。この国華本については、すでに「長恨歌」を主たる典拠としながらも、場面構成が複雑で各場面を詩の内容に即して辿ることが困難であること、玄宗が月に昇る場面では、宋の樂史著『楊太真外伝』を出典とすること、安祿山の戦闘場面の人物描写などに風俗図との関係が見出されること、場面間の繋ぎ目に詩の内容と直接関係のないモチーフ（瓜畑、南蛮人）が挿入されていることなどが指摘されている。

本発表の課題は、国華本の場面構成が何を典拠として行われているのか、各場面の図像の出典は何か、新たに挿入されたモチーフの源泉が何であるかを、同時代に流通していたテキストとイメージの両面から検討することによって、「長恨歌図」の系譜における国華本の位置づけを再考しようとするものである。

そのため、まず国華本の場面構成を明らかにし、それが「長恨歌」の詩句に直接依拠するというよりも、江戸前期に出版された「長恨歌」の絵入り注釈書である『長恨歌抄』の記述順に行われていることを確認する。すなわち国華本は、「長恨歌」の詩の展開を念頭に置く限り複雑に見えるが、『長恨歌抄』を参照すると、両隻とも右から左、上から下へジグザグに場面が配列されており合理的に読むことができることを指摘する。つぎに、国華本の図像のうち『長恨歌抄』に基づく場面のイメージ源泉を調査し、例えば安祿山の戦闘場面で日本風の鎧を着用した兵士の描写は、中世の恋愛物語を町人の世界に置き換えて、温泉の場面で玄宗と楊貴妃の逸話に言及する仮名草子『是樂物語』中巻（明暦・万治頃）や、仮名草子風の浄瑠璃正本である『楊貴妃物語』（1663年）の挿絵と共通することを明らかにする。このほか、驪山宮の高樓の描写が、狩野永納の出版した『長恨歌図抄』（1677年）の挿絵（狩野山雪の《長恨歌画卷》の図像を典拠とする）と類似していること、また玄宗が月に昇る場面は、奈良絵本《長恨歌》（龍谷大学、寛文・延宝頃）とほぼ同図様であることを指摘する。さらに、画中に新たに挿入されたモチーフの意味解釈を試み、瓜畑を子孫繁栄、南蛮人を客人＝福神、楊貴妃の墓に添えられた白象を女人往生の象徴として捉えるならば、国華本は玄宗ではなく、「女性」の理想的な生き方に焦点を合わせていることを指摘する。これらのことから、国華本は「長恨歌」の詩に基づきながらも、絵入り注釈書、仮名草子、奈良絵といった近世的メディアと交渉することによって、フリア本のように公的空間を荘厳する屏風としてではなく、女性の嫁入り道具として制作された可能性に言及する。